

私家版

2014年歌集

時のパースペクティブ

Kouetsu Saito

斉藤 光悦

あと何年生きられますか 亡父ちちに問いその父あかに問う明き墓前に

太陽の周りをおよそ八十回まわって宇宙の塵に還りゆく

五十二年生きて来しこといささかも信じえぬまま水中を掻く

電飾の街ゆく夜ふけ我が家とか死とか老いなど意識より去る

驟雨きて日常の時とまりたり 上から下へ水おちるのみ

三十年まえ野宿せし公園に揺れるぶらんこ歳月は霧

あのベンチそこに差し込む木漏れ日の形いまでもあの頃のまま

蟻の巣の蟻の出入りに見入る昼 幼年と今 夢はいずれか

目の前を雀三羽がよぎりけり私を知るか知らぬか知らぬ

曇天の街川の洲に驚立てり視界の中の白を掻き集め

公園という公の思索場に今日も昏れゆくひとりふたりが

どうだん
満天星の小さきあまたの釣り鐘くるに包まっている日々の思い出

終電を逃した駅の段の果て口あけている並行世界

踊れおどれ世界が終わるその日にも 笛 鉦 太鼓 鳴らんかぎりを

いつやむとしれぬ大雪の夜を走る電車はいつをどこを目指すか

夕方の宙そらに花浮く紫木蓮わすれ得ぬひと呼ぶがごとくに

生きてきてなお生きてゆくこの時空ほんとか夢か定かならねど

手のひらにキミの雫を受けてみる樹木よ時はなぜ狂おしい

妻 ある夜 辞職願を決然とされど不気味にしたためていつ

遠い目をして夕映えを見つめている犬の心は吾が心かも

日曜のたそがれ時の憂鬱を懐かしという老人と呑む

いずこにて生まれここまで来たりしかその風ももう遠ざかりけり

橋わたる電車は音を刻みつつ窓に夕日を燦然と受く

霧を行くこの白い闇を突き抜けて岐路で別れた俺に会うため

ユーラシアに歴史はつづく滔々とプラトン、始皇帝も一瞬の人

鉤型に空を引き裂き稲妻は地表へ走る太古もいまも

川面差す億兆粒の水滴をわれは見ている信仰のごとく

ビル街を烈しき日射浴びて行くわが影黒く〈我〉の凝縮

愚痴酒を諫めるごとく水槽の鯛が見ておりわれの酔眼

場末なる安居酒屋の小ぎたなきカウンターから思い出ぞ顕つ

成人病検診のまえ数日のノンアルコールビールは救世主^{メシア}

怖くない何も恐れずともよしと言ひ聞かせおり月曜前夜

実存は脅かされおり無意識に駅へと向かうこの爪先に

かなしげな瞳を向けて野良猫がわが来し方を見透さんとする

フロイトとユングの説を読み比ぶ暗き無意識あぶりだすべく

夕靄に白き木槿^{むくげ}の浮きたつを喇叭口より旋律かそか

いつかまた会おうと約し別れたるその人はいま火焰の中に

アルバイトに押し込められし熱帯に繁殖するや孤独ウイルス

職場からひとつ向こうの駅に降りちがう人間演じる十時

吊革をつかみ体を支えれば他の吊革と鬱の交流

まど 鏡は鏡 鏡は扉ドアになるらんか 押せば異境へ開かれる扉ドア

雪はいま降りはじめらんしんしんと低雑音の戶外より消ゆ

故里の山紫水明恋いながら死ぬまで生きるコンクリート都市

宇宙塵の一瞬・極微の構造体<オレ>が<アナタ>を愛して<ムスメ>

焦燥と孤独いや増すがに燃ゆる独身時代の夕映えに遭う

ブラームス^{シンフォニー}交響曲四番たそがれにヘッドホンから漏れて震えつ

スイミングプールの底へ光降る おぼれかけたとき見えた光が

しゃぼんだま指でつつけばはかなくて夢ありし日のキャンパスが見ゆ

やがてゆく無明の隧道そのままに歴史見晴らす丘に立ちたし

わが赤子はじめて抱きし日の空を今もさがしている朝^{あした}あり

父という生き物に吾^わを変わらしむ娘にかけられし魔法消ゆるな

齊藤光悦 2014年歌集「時のパースペクティブ」 私家版

http://www.geocities.jp/saito_kouetsu/2014kasyu.pdf

草加市吉町 3-4-22

e-mail:kouetsu.saito@gmail.com